

## 最も短い詩としての俳句の性格（Ⅳ）

山口青邨

かうした極度に短い詩形——このことはたくさん制限をするものをもつ必要があった、どうしてこの短いものの中にたくさん内容を盛るか、複雑なものを盛るか——このことのために數百年たくさんの人達が苦心をして来たのである。

たくさんのものを盛る、複雑なことを盛る——さういふことは結局不可能なことであった。そこでどうしてたくさんのことを減らすか、複雑なことを単純化するかといふことに苦心したのである。俳句は結局はこの単純化といふ處理法に歸するのであった。

これがためにはいろいろの表現法が發明されたり、研究されたりした、季題といふものの發明とその巧妙な使用もその一つである。

いろいろの切字などから来る餘韻といふものが重視された、さういふものに對する感覚はまた作者ばかりでなく、鑑賞者側に要請され、訓練されなければならなかつた、日本の文化の或る面はかうしたしつけに似たものを多分に含んでゐる。

少くとも過去の——子規が俳句の革命を企てるまではさうしたことが非常に嚴格であつた。

後年虚子等が寫生を實踐し、俳句の分野を廣くし、その材料の自由を認め、新季題の増加、切字等の奔放をゆるしたことによって、俳句は随分豁達な姿になつた。

しかもなほ五・七・五、十七字、有季といふ枠は外されないのである、これ以上に出れば俳句の構成が破壊され、俳句としての性格が失はれるからである。

俳句に於ける単純化といふことはまた象徴といふことの尊重にもなるのであつた。端的に人の感情に食ひこむ方法が當然選ばれなければならない。